

双葉支部



田中建設 株式会社

工事部長 富士田 一夫

放射線との戦い誇りに

3月11日、東日本大震災の時に私は、川内村の五枚沢で道路舗装工事の社内検査をしていました。地震は経験したことのない強い揺れで、立ってられないほどでした。地震が一旦落ち着いてまず思ったことは、相双農林事務所発注の消波堤工事のため、たった今海岸で竣工検査をしているはずの同僚のことでした。「津波が来るぞ早く逃げろ!」。急いで電話すると、幸いにも午前中に竣工検査を終え、会社に戻っているとのことでした。とても安心したことを覚えています。

私も社内検査を打ち切り、会社に戻ることになりました。国道288号で会社に向かっていると、JR常磐線の橋桁が落下していました。余震が続く中、橋脚に立てかかった状態でかろうじて立っている橋桁の隙間を通った時「これは大変なことになった」と強く思いました。

原発事故のため、私は関東で生活する弟妹の家に避難し、3月末には会社からの要請で福島県に戻りました。平日はいわき市で被災地に入る準備に追われ、週末に母親が避難する茨城県大洗市に戻る生活が続き、心身ともに疲れていましたが「地元のために何かしなければ」という使命感に燃えていました。

まず始めは、県からの依頼で双葉町に入り、4月24日から中野地区の双葉海水浴場の周辺で行方不明者の捜索を行いました。私のチームは7人でバックホウが5台体制。がれきの下に行方不明者がいるかもしれないと思うと、撤



去作業はおのずから丁寧なものになりました。朝9時～午後3時まで8日間作業し、放射線量は日によって違いましたが毎時12～17 μ Svの間でした。双葉町の捜索では結局、行方不明者を発見できませんでしたが「一刻も早く見つけてご家族のもとに返してあげたい」と最後まで士気が下がることはありませんでした。

続いて、5月2日から入った浪江町では、大勢の行方不明者が見つかりました。ご遺体を発見したオペレーターはバックホウのアームを上げて周りに合図します。空高く上がったアームを見ると、見つけて良かったという思いと、原発事故さえなければもっと早くご家族のもとに返してあげられたのにという複雑な気持ちになりました。

浪江町での捜索は9月7日まで続きました。放射線量は毎時7～12 μ svの間です。移動中も作業中も車両の窓は必ず閉め、食事や飲み物は車内で済まし、体内被曝を防ぐためタバコも屋外では絶対に吸わないようにしていました。また、タイベックススーツと防じんマスクを着用しての作業だったため、暑さで体重が5kgも減りました。

私たち建設業に携わる者は、3Kなどと揶揄されながらも、常に除雪や台風などで出動して地域貢献し、それが使命だと思っています。しかし今回、放射線を浴びながら、警戒区域も解除されていない地域に勇気をもって入っていたことは誇りに思っています。

